
雪の嘘

はしもと なおや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪の嘘

【Nコード】

N7777Q

【作者名】

はしもと なおや

【あらすじ】

駅は別れの場所だと思う。幸せな別れでも悲しい別れでもそれは変わらない。ホームに残った僕があることをふと思い出す。

君はうそつきだ、なんて言葉を、今君に伝えたい。

×

電車のドアが閉まり、徐々にホームを離れて僕たちを置いてけぼりした。君が乗るはずだった電車は暗闇の中をスムーズに加速していった。ものすごく寒い。こんな田舎の駅では僕たちと駅員くらいしかいなかった。ベンチに座る僕たちの手はもう離れてしまっていた。

「あー今日は星が見えない」

なんて、しんみりとした空気を変えるために僕が大げさに立ちあがって、わざとらしく見えない星空を見上げた。空はどんよりと思い泣きそうなことを隠そうとして吐く息がはつきりと白くなる冷たい空気の中、僕の背中では君の表情を探ったけれど、結局何もわからないまま。

君がさつき別れを切り出したとき、僕の中で君を好きな気持ちが最大限に達した。なんでこれまで、この気持ちに気づけずにいっしょにすごしていたのかと思った。君にこの駅で「好きだ」とありふれた言葉で告白した日から僕の「好き」という感情は次第に強く大きくなっていたことに、僕は気付けなかった。君には伝えたいことが、まだたくさん残っている。僕はこの場でそれを言葉にしたいと思うけれど、その想いは言葉の域を超えていた。伝えたい想いが宙に舞って白いため息に変わっていく。

そんな、そんなことを考えていたら、見えない星空を見上げていても、どうしても、どうしても涙がこぼれてきて、どうしようもなかった。僕は君の右手の感触を思い出すように左手を強く握りしめた。手袋をしていないその左手は本当に冷たくなっていた。

「ごめんね。」

ぼそつ、と後ろから君がつぶやいた気がして振り返った。もう僕の目は真っ赤で、見せなくなかったけれど、勇気を出して大好きな君を見た。

「ごめんね」

今度ははっきり聞こえた。君の目も僕とお揃いだった。

「…うん。大丈夫」

僕には、こうやって答えることしかできなかった。君が何かを隠していること、僕にはどうにもできないこと、それが別れの理由だったというのは、鈍感な僕にもわかっていた。だから、それが一番、君のためになる答えだったんだと思う。

君の終電の電車が入ってくるアナウンスが響く。いつの間にか、何人か電車を待っている。減速してきた電車のドアが開く。君はうつむきながら開いていない反対側のドアのほうへ歩いて行った。

僕は見えない星空を見上げた。

雨―雪？

電車は君を連れて遠いところへ行ってしまった。

x

君はうそつきだ。君といつか「雪が降ると『わーい』とか小学生みたいにはしゃいじゃうんだよね」なんて言っていた。結局二人ともはしゃいでなんていなかった。君との初めての雪は、見えない夜空から流星群のように、線路に降り積もっていた。

（後書き）

今日雪ふりましたねー寒い！！
雪とか駅とかほんと泣きたくなるので。切なくなりますよ、寒いと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7777q/>

雪の嘘

2011年10月8日18時10分発行